

近世中期における地方本草学派の興隆 ——尾張本草学派「嘗百社」を中心に

The Rise of Local Herbology Schools in the Middle Edo Period:
A Case Study of Owari Herbal Schools

謝 蘇杭
SHA Soko

要旨 本論文は近世中後期の地方本草学派——尾張本草学派の内実を解明しようとするものである。京都本草学派の大家——小野蘭山の学統を継承した尾張本草学派は、嘗百社というグループを中心に活動し、その学風は実に蘭山から継承しているところが多い。本稿は尾張本草学派を「蘭山の学統」として認識し、蘭山を経由して成立したその学問的性格を明らかにしようとする。また、嘗百社のメンバーたちと藩医浅井貞庵との一連のやり取りを検討することを通じて、それらの人たちの身に宿っている実学的本草学の特徴を明らかにしようとする。この二つのテーマに対する検討を通じて、尾張本草学派の実像をより明晰に浮かび上がらせることを期するものである。

はじめに

19世紀初頭に次第に興隆してきた地方本草グループ——尾張本草学派（嘗百社）は、18世紀における文化的中心であった京都で正統派本草学として立ち上げられた京都本草学派や、政治的中心の江戸で幕府の施策に恵まれて台頭した江戸本草学派などと比べれば、相対的に地位が低くみえるが、近世中後期における本草学研究の中心が地方へ移行する現象の具体的事例の一つとして、また、近世本草学研究体系の科学化・体系化の過程を示すものとして、大きな注目に値する。

尾張本草学派に関する先行研究はそれほど多くはない。尾張本草学派に対する記述は、主に日本本草学概説書において散見され、またはその代表者伊藤圭介に関する研究¹⁾のなかで触れられることが多い。早い時期における基礎的研究を除いて、比較的新しい研究として挙げられるのは、財部香枝（2005）²⁾、磯野直秀・田中誠（2010）³⁾、福岡真紀（2012）⁴⁾などである。なかでも福岡氏の研究は、嘗百社の「写真」に係わる活動を掘り起こす貴重な仕事であり、近世本草学の図譜史研究にとっても重要な意義を有している。

尾張本草学派の創始およびその沿革を記した基本文献として、伊藤圭介が90歳の生誕に際して、尾張嘗百社が作成した『錦窠翁九十賀寿博物会誌』（上）⁵⁾の巻末に収載されている圭介自筆による長文「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雑記」と、尾張の郷土史

1) 杉本勲『伊藤圭介』、吉川弘文館、1988年。

2) 財部香枝「シーボルトを敬嘆させた尾張本草学——嘗百社の活動を中心に（特集 名古屋のカルチュラル・スタディーズ）」、アリーナ（2）、中部大学編、2005年、35-50頁。

3) 磯野直秀・田中誠「尾張の嘗百社とその周辺」、『慶應義塾大学日吉紀要・自然科学』（47号）、慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会編、2010年、15-39頁。

4) 福岡真紀「嘗百社と写真：統合された写真史に向けて（特集 写真論）」、『近代画説：明治美術学会誌』（21）、明治美術学会編、2012年、31-47頁。

研究者吉川芳秋氏の著作集『医学・洋学・本草学者の研究——吉川芳秋著作集』⁶⁾との二点が最も重要である。前者は尾張嘗百社の創始沿革およびその活動内容についての概説で、後者は尾張における本草学者、医学者、洋学者の人物誌を扱っている。この二点の基本文献にはなお不足しているところが多いが、近年、磯野直秀と田中誠による尾張嘗百社の関係資料を集めた論文「尾張の嘗百社とその周辺」には、かつての基本文献における空白がある程度まで埋める新資料が掲載されている。本論の第一章では、以上の基本文献をベースにしつつ、時代背景を踏まえて、尾張本草学派（嘗百社）の成立経緯およびその本草学研究における特徴を簡単に紹介する。

尾張本草学派の中心人物である水谷豊文は、京都本草学派の代表格——小野蘭山の門人であるゆえ、豊文が統率している尾張本草学派は蘭山の学統を継承しながら、一方では従来の本草学と異なった学問的性格を呈している。蘭山の学統は、京都本草学派に属しているながらも、その学問観と研究方法は、彼以前の稲生若水・松岡恕庵が代表した「伝統」的な京都本草学派の学風とはかなり相違している。この両者の間の関係性を究明する手助けになるものは、近年太田由佳氏が著した『松岡恕庵本草学の研究』⁷⁾と、小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会によって編纂された『小野蘭山』⁸⁾の二点の大著である。太田氏の著書では、恕庵の生涯と活動、本草学の特色、学問観、門人などを焦点に、恕庵の本草学に対して全面的な考察を加えている。『小野蘭山』には数多くの蘭山に関する論述が収録され、さらに近年本草研究者によって発見された蘭山関連の新しい資料も所収されている。本論の第二章では、以上の先行研究を用いて、「蘭山の学統」を究明したうえで、尾張本草学派と京都本草学派の関係を明らかにしようとする。

通常、尾張における本草学研究といえば、水谷豊文を中心に自発的な本草研究を展開した「嘗百社」という本草グループを思い浮かべることが多い。「尾張本草学派」という呼称も、ほとんどの場合、このグループのことを指している。実際のところ、19世紀前半から20世紀初頭にかけて、尾張における本草学に関係しているのは、嘗百社以外に、もう一つの系統があった。それが当時藩医として尾張藩内で大きな影響力を持った浅井家である。浅井家と嘗百社の本草学における性質はかなり異なっているが、色んなきっかけを通して関わっており、影響し合っている。この両者の関係に触れた研究として、遠藤正治氏による二点の論文が挙げられる⁹⁾。本論の第三章では、尾張嘗百社のメンバーと浅井貞庵とのやり取りの検討を通して、嘗百社各メンバーの本草学における実学的性格を見出そうとする。

本論文は、以上の一連の手続きを通じて、最終的には、より近代科学へ接近し、明治期まで輝きを失うことがなかった尾張本草学派の実態を明らかにすることを目的とする。

⁵⁾ 伊藤圭介「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雑記」、『錦窠翁九十賀壽博物會誌。上』、名古屋愛知博物館、1893年。

⁶⁾ 吉川芳秋『医学・洋学・本草学者の研究』、八坂書房、1993年。

⁷⁾ 太田由佳『松岡恕庵本草学の研究』、思文閣出版、2012年。

⁸⁾ 小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会編『小野蘭山』、八坂書房、2010年。

⁹⁾ 遠藤正治「圭介の『尾張博物学雑記』と浅井貞庵」、『伊藤圭介日記』第四集、名古屋市東山植物園、1998年；遠藤正治「伊藤圭介の医学思想について」、『伊藤圭介日記』第六集、名古屋市東山植物園、2000年。

第一章 尾張本草学派について

(一) 時代背景

江戸初期の儒者、本草学家が相次いで取り組んだ『本草綱目』に対する翻刻・校注・伝写などの作業によって、日本の本草学は急速な普及と発展を遂げた。江戸初期の日本で流布していた各版本の『本草綱目』に対する利用を通じて、日本の各地において優れた本草学家が輩出し、新しい本草学派も次々と現れた。例えば、京都を中心に発展してきた京都本草学派は、本草学派の正統派とされている。その創始者は稲生若水である。また、幕府の殖産興業の政策に応じて時運に恵まれて台頭した江戸本草学派は在野学派とされていて、その創始者は阿部将翁である。伝統派の代表である京都本草学派が本草典籍への考証と対照を重視する一方、近代日本の物産学との結びつきが強いところが江戸本草学派の特徴である。江戸本草学派の発展は近代物産学の誕生にかけ橋の役割を果たしたものともいえよう。その学派の一番著しい業績は日本では広く知られている朝鮮人参の日本本土での栽培成功である。

当時の文化的中心である京都と政治的中心である江戸のほか、江戸幕府の管轄下の地方の藩内では、本草学の研究ブームも賑わっていた。その中で特に代表的と言えるのは、尾張藩における尾張本草学派と、美濃藩における美濃本草学派であろう。近世中後期盛んに発展していた尾張、美濃などといった地方本草学派は、積極的に洋学を本草学に取り入れながら、親試実験などの実証主義的な研究方法を徹底していた。上野益三は自著『日本博物学史』において、近世の本草学史（博物学史）を、(1)『本草綱目』輸入以前の時代；(2)前『大和本草』時代；(3)後『大和本草』時代；(4)シーボルト渡来以後の時代と、四段階に分けている¹⁰⁾。そのうち、(2)の「前『大和本草』時代」において、上野氏は文化の江戸への東漸に先立つ、本草学の西海から京坂への東漸の過程に注目し、その過程における本草学の発展は『本草綱目』を中心としながらも、段々と本土化していく過程でもあったと述べた¹¹⁾。それに対し、近世中後期に発生した本草学の京都・江戸から地方への移行は、近世本草学史のもう一つの画期として考えることができるだろう。つまり、近世初期における本草学の西海から京坂への東漸は日本本草学の本土化を達成したのに対し、近世中後期における本草学の京都・江戸から地方への移行は、日本本草学の（西洋科学への接近の意味での）近代化を標示していると言えよう。尾張本草学派の伊藤圭介の『泰西本草名疏』によるリンネの二十四綱目の導入、および美濃本草学派の飯沼慾斎による日本初の近代科学的植物図譜『草木図説』は、日本本草学の近代植物学への進化を基礎づける重要な成果として、以上の論点を説明するための最良例である。

この「地方本草学派の興隆」を導いた社会背景として、地方における経済水準の向上や、藩校の設立による地方の学芸の隆盛、そして有能な知識人が地方に下り、教育に従事することなどによって、地方の文化が相対的に高まったことなどを挙げる¹²⁾。以上の二、三点は、ともに享保改革における吉宗の施策に大きく関係している。享保期の殖産興業における本草関係の施策を挙げると、各藩における天産物を特定する「諸国産物調査」や諸藩における薬園の設置、特産品の奨励栽培などがある¹³⁾。また、18世紀後半各藩

¹⁰⁾ 上野益三『日本博物学史』、講談社学術文庫、1989年、65頁。

¹¹⁾ 上野益三『日本博物学史』、講談社学術文庫、1989年、70頁。

¹²⁾ 源了円『近世初期実学思想の研究』創文社、1980年、95頁。

で多様化した学問の開花も、享保期荻生徂徠の藩校設立構想の影響下で、諸藩における藩校の設立と整備によるところが大きい。尾張藩の場合、寛永年間と寛延元年（1748）に設置された二つの藩校はすぐに廃れてしまったが、天明三年（1783）明倫堂が設けられ、折衷学派の儒学者細井平洲が学館総裁を務め、庶民にも聴講させている¹⁴⁾。

（二）尾張本草学派の成り立ち

尾張における本草学の発展は、吉川芳秋氏によれば、三つの系統に分けることができる。一つは蘭山派以前の独自派と見做される一派で、三村森軒や松平君山などの蘭山以前の尾張本草学者が挙げられる。もう一つは医家としての領域にあった、浅井凶南一家一門である。最後の一派は、蘭山系統として多分に近代科学に接近した尾張本草学派、つまり水谷豊文を代表としたいわゆる尾張嘗百社の人々である¹⁵⁾。そのうち第一派の松平君山は、尾張における本草学の首唱者と称されているが、その著書『本草正譌』は伊藤圭介によれば「頗ル謬誤アリ」¹⁶⁾と評されている一方、吉川氏はその著書を中国の伝統本草学に対して批判的な姿勢を示す「日本人なりとの自覚抱負」を抱いているものとして高く評価している¹⁷⁾。松平君山を代表とした第一派は、尾張の本草学において比較的孤立した系統なので、特にここでは詳細には触れない。したがって本稿は第三章において、嘗百社を焦点にすると同時に、それと深く関わっていた第二派の浅井一門との関係を解明することを通じて、尾張本草学派の実学的性格を描き出そうとする。

尾張本草学派の創始は「嘗百社」の創設から始まったのである。「嘗百社」は京都本草学派の代表人物である小野蘭山の門人、水谷豊文と大河内存真、伊藤圭介などによって結成された本草研究会であり、「嘗百」とは中国古代「神農が百草を嘗める」という出典に由来する。その学派の代表的人物は初代の盟主である水谷豊文と、豊文のあとを継いだ伊藤圭介である。

尾張本草学派および「嘗百社」の創立経緯については、伊藤圭介が自分の九十歳の誕生日に書いた「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雑記」に詳しい。伊藤圭介は『雑記』のなかで以下のように書いている。

爾後文化ノ頃、本草ヲ嗜ムモノ頗ル多ク、同好相集リ、時々互ニ講習セリ。其徒ハ淺野春道（小野蘭山翁ノ門ニ入り、尾ニ歸リテ其説ヲ首唱セリ）、水谷助六（名豊文、号鉤致堂、亦蘭山ノ門葉ニシテ、旧藩ノ薬園ヲ監守セリ、此翁ハ植物、動物、鉱物ヲ精研シ、御嶽、伊吹、熊野、其他諸高山ニ躋攀シ、仔細ニ採集シ、家園ニモ培植ノ其品極メテ夥多ニシテ、研窮刻苦、日夜倦ムコト無シ、其説最多識ニシテ、諸国及門ノ徒亦最多シ、物品識名二卷、同拾遺二卷ヲ著ハス、此編、動、植、鉱ノ三物ヲ検査スルニ、簡便ノ好書ニシテ、今ニ至ル迄、大ニ諸国ニ行ハル）、大窪太兵衛（号薜荔庵、亦一ノ博物

¹³⁾ 杉本勲『近世実学史研究—江戸時代中期における科学・技術学の生成—』、吉川弘文館、1962年、174-175頁。

¹⁴⁾ 大石学『江戸の教育力』、東京学芸大学出版会、2007年、32頁。

¹⁵⁾ 吉川芳秋「尾張本草學の回顧（上）」、『日本医学雑誌』（1301号）、日本医史学会、1942年3月、87頁。

¹⁶⁾ 伊藤圭介「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雑記」、『錦窠翁九十賀壽博物會誌。上』、名古屋愛知博物館、1893年、93-94頁。

¹⁷⁾ 吉川芳秋『医学・洋学・本草学者の研究』、八坂書房、1993年、319頁。

家ナリ)、岡林清達、柴田洞元(号溶々齋、此人所著ノ日用藥品考ハ、和漢ノ藥品ヲ詳解シ、真偽ヲ弁哲シ、漢医薬舖ノ珍宝トス)、西山玄道(号松隠、伊藤圭介父、平素医療繁劇ノ際、亦此学ヲ修ム)、浅野文達等ニシテ、時々集會シ、藥物其他種種物品、臘葉等ヲ袖ニシ來テ、互ニ鑑訂シ、其説、中不中ヲ競ヘリ。大河内存真其頃、尚年少ナリシト雖モ、亦相列レリ。或ハ時々本草諸書ヲ會讀シ、和産有無、各自ノ發見等、相謀リテ鑑定セリ。其頃詩經名物会ヲ本町覚正寺ニ開キシコトアリ。其列品最モ多数ニシテ盛會ナリシナレバ、読詩家参考ノ資トナリシ。此詩經品物会ハ、爾後多年ヲ歴テ、又伊藤ノ家ニテモ、一回開設セシコトアリシ¹⁸⁾。

尾張本草学の嚆矢は、寛政、享和の頃であり、化政期に至ってその隆盛が見られた。水谷豊文、伊藤圭介による主宰のもとで、嘗百社は日本における科学学会の古形なるものともいえ、その研究範囲は動・植・鉱物諸産にわたり、すべての品目に対して精密な考証を行い得た。吉川氏によれば、尾張本草学派に至ってこそ、日本本草学は『本草綱目』を宗とした段階を乗り越え、広く自然科学研究の分野に入ったのである¹⁹⁾。

(三) 学問的性格

以下、尾張本草学派の学問的性格について、簡単な素描を試みる。次章において、京都本草学派に対する継承と止揚を軸に更なる具体的な検討に入る。

尾張本草学派の本草学者たちの本草典籍の文献上の研究と、植物個体に対する名実の確定を重視している側面から見ると、京都本草学派とほぼ一致するように見える。しかし、水谷豊文を盟主とする尾張の本草学者たちは、こうした正統本草学の伝統を一応継承しながら、しかも協力して採集・品評・討論などの本草学研究をしている²⁰⁾。このような経験的・実証的な研究方法は、貝原益軒の跡を継いだ尾張本草学派のもっとも鮮明な特徴である。

尾張本草学派の本草学者たちには蘭学の影響が強い。この傾向は同時期の他流派の本草学と比べると特に鮮明である。例えば、水谷豊文は熱田駅でシーボルト²¹⁾と二回会見したことがある。シーボルトとの会見に豊文は、自分の著した手彩色の動植物図譜を持参したが、そのうちの植物図譜にはリンネ流の学名が記されていて、シーボルトを驚かせた。実は、豊文は、ハウトイン²²⁾の『自然誌』を入手していて、採集した植物の学名鑑定を本書に基づいて行っていたのである²³⁾。

尾張本草学派の本草学の実学的特徴はその写実的本草図譜の中にも反映されているのである。水谷豊文の『彩図動植物図譜』にせよ、伊藤圭介の『小石川植物園草木図説』にせよ、その絵図の精細さはまさに当世の一流ともいえよう。

¹⁸⁾ 伊藤圭介「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雜記」、『錦窠翁九十賀壽博物會誌。上』、名古屋愛知博物館、1893年、93-94頁。

¹⁹⁾ 吉川芳秋「尾張本草學の回顧(中)」、『日本医学雑誌』(1302号)、日本医史学会、1942年4月、141-142頁。

²⁰⁾ 杉本勲『伊藤圭介』、吉川弘文館、1960年、108-109頁。

²¹⁾ Philipp Franz von Siebold(1796-1866)、ドイツ内科医、植物学家、旅行家、キャラクター。

²²⁾ Maarten Houttuyn(1720-1798)、オランダ医者、博物学家。リンネの植物分類法の影響を受け、37巻の『自然誌』を著した。

²³⁾ 西村三郎『文明のなかの博物学—西欧と日本。下』、紀伊國屋書店、1999年、499頁。

また、尾張藩では薬園の設立も特に盛んであった。園芸の流行と相まって、薬園と称しながら、専ら観賞用の園芸植物を栽培した場合も多い。こうした薬園の隆盛は園芸学と植物学の近代的発展の大きな推進力となったといっても過言ではない。

先に述べたように、水谷豊文が『自然誌』を利用して自分の植物図譜にリンネ流の学名を記したといっても、豊文がハウトインの著書を自由に読破できたわけではない。豊文のオランダ語レベルはせいぜいオランダ語の発音が多少できる程度で、自分の植物図譜にリンネ流の学名を付けることができたのは、彼が長年、実地考察で鍛えた植物に対する眼力と経験によるのである。したがって、たとえ豊文が個々の植物に属名をあてはめることはできても、リンネの分類体系の詳細や意義、精神などを理解することは、およそ望むべくもなかったと思われる²⁴⁾。本当にリンネの理論体系を理解して、またその体系を日本に紹介したのは、水谷豊文の弟子である伊藤圭介である。

第二章 蘭山の学統——尾張本草学派と京都本草学派の関係性

(一) 学問的性格への継承

伊藤圭介を代表とした尾張本草学派は、京都本草学派との交流が密接であった。その因縁は尾張本草学派の創始者、「嘗百社」の盟主である水谷豊文まで遡ることができる。豊文は小野蘭山に師事して本草学を学んだので、その本草学の内容はまぎれもなく京都本草学派の特徴を継承した。しかし、尾張本草学派の門人の多くは医家で、後の伊藤圭介やその兄・大河内存真が蘭学の影響をも受け、また、尾張藩が幕府の殖産興業の政策にも影響されていたなどという原因で、尾張本草学派は京都本草学派から発展してきたといえ、京都本草学派とは異なる学問的性格を持っていた。尾張本草学派と京都本草学派との間の関係性を分析することで、尾張本草学派の独特な学問的性格が見えてくるはずである。

ここで一概に「京都本草学派」といっても、松岡恕庵の没後、蘭山の代に至っては京都本草学派内部において学問的性格が大きく分岐していることが見受けられる。京都本草学派は、恕庵の師である稲生若水によって立ち上げられ、その学風は本草品物の名実同定を重視するいわゆる書斎派的な性格を持ち、「儒医兼学」の志向が見られる。恕庵の門人・浅井図南は、恕庵の『用薬須知後編』に序を寄せ、恕庵の本草学について象徴的な一文を残した。

夫れ先生の博物、実に東方三千載の一人なり。然りと雖ども先生の業、豈に此れのみ
に止まらんや。先生の修経、上は洙泗の源に浜り、下は閩閩の奥を窺ふ。海内鉅儒能く
及ぶ者莫し。傍ら国家典故制度より、医卜積老の教に至るまで、其の理を窮めざる莫し。
博物は特だ其の土苴なるのみ。儒者反て博物の掩ふ所と為る、亦た遺憾ならずや。(原
漢文)²⁵⁾

以上の一節から窺えるのは、学通古今かつ精研広博たる恕庵の博学多才に驚嘆する一方、彼があくまで些末な本草学に従事する人として世間に認識され、儒者としての名が隠されてしまったことに対する図南の遺憾である。同じような文脈は、儒者室鳩巢の、恕庵の師

²⁴⁾ 西村三郎『文明のなかの博物学—西欧と日本、下』、紀伊國屋書店、1999年、499頁。

²⁵⁾ 松岡恕庵『用薬須知後編』4巻、国立国会図書館所蔵。

である稲生若水の『庶物類纂』に寄せた序文にも見られる。鳩巢は若水の『結髦居別集』の序文において、「稲君隠於本草者也」と記し、儒者の若水が「正天下」の志を持っていると考えた。ただ、残念なことに若水は「身無位、不得行其志於天下」、やむを得ず、退いて本草名物の学におもむいたのだと説明している²⁶⁾。

本草に従事することは世間萬物を多識するためであり、本草を媒介にして最終的に人間の究極的な真実に到達する。このような儒学的道德倫理観に裏付けられた、博学志向を重視する学問態度は、師の若水から恕庵を経て、その門人に至るまで、終始京都本草学派の学問観の中軸に据えられている。

ここで注意に値するのは、恕庵の門人浅井凶南は、尾張の本草学の一系統をなしていた浅井家の人物だという事実である。浅井家は尾州徳川家の藩医を務め、凶南はその第五代にあたる。凶南の父、第四代の東軒が尾張藩医として離京するまでは、代々京都で医業を営んでいた²⁷⁾。『浅井氏家譜大成』における凶南の部分を見れば、「先君周廸（東軒の通称）一日門人ト語り、盛二（伊藤）東涯、（堀）南湖ノ才学ヲ称ス」などの箇所や凶南の就学状況を示す部分から、浅井家の儒医兼務、しかも儒は医よりも優先度が高いとされる学問観が見られる。それと同様の学問観は若水の父、恒軒の墓誌にもまたうかがわれる²⁸⁾。浅井家のこうした儒医兼務、儒学志向の姿勢は、蘭山の学統を継承した尾張本草学派（嘗百社）とは本草学上大いに異なる方向を志向しているため、後の尾張の本草学の発展は、浅井家と嘗百社という二つの系統に分岐したのも、不思議ではないことである。この点は、幕末期における浅井家が主催した「薬品会」と嘗百社が主催した「本草会」とを比較すると明らかに見出される。にもかかわらず、浅井家と嘗百社の学問的性格の相違は、むしろ尾張における本草学の発展に創生的な力をもたらし、近世本草学の進化に創発的な影響を果たしたとも言えよう。浅井家と嘗百社との関わりの複雑な内実については、次章において具体的に言及する。

若水、恕庵から凶南、松岡定庵（恕庵の嗣子）まで継承されてきた京都本草学派の伝統的な学風は、蘭山に至って、方向性の転換が発生した。蘭山が晩年門人に宛てた書簡のうちに、次のような文面がある。

名物之事ハ前々より儒家面々ニ被考置れ候も、専門之人ハ無之、物産吟味之事ハ稲先生より之事と相見へ申候。（中略）元来貝原、稲、松岡三先生ハ皆伊藤家ニ而同友之事なれば、互ニ相談も可有之事也。

本艸ノ学ハ稲先生より先師へ伝わり候由。即、物故之節も封し遺して先師へ被伝候書付も有之候よし、嘗而聞及べり。貝原先生ハ稲先生より先達而物故せられし故、貝原先生より先師へ伝わると云事ハ無之事ニ候²⁹⁾。

²⁶⁾ 稲生若水『結髦居別集』巻一・序。

²⁷⁾ 浅井国幹『浅井氏家譜大成』名著出版、矢数道明解説、1980年。

²⁸⁾ 杉立義一「稲生恒軒・若水の墓誌銘について」、山田慶児編『東アジアの本草と博物学の世界（下）』思文閣出版、1995年、299-327頁。恒軒の墓誌にはその子弟に医術を教えなかった理由として、「経術の学んで以て遠を致すべき者有らば、何ぞ小技を屑とせんか」と、儒の医に対する優先性をアピールした一文が記されている。この墓誌が若水の依頼を受けて東涯が撰じたものであるということからみて、若水のなかにおける儒と医の関係も自然にうかがえる。

以上の文面において晩年の蘭山は、自分の学統を意識しながら本草継承系譜を整理している。ここでポイントになっているのは「物産吟味之事」である。つまり、従来の「名物之事」は儒者が従事していた些末の事で、独立した専門学科とは呼べなかった。若水一翫庵一蘭山という学統を意識した蘭山は、本草学を儒学的思想背景から剥離した独立した専門知として考えているのである。このような形而上的な要素を除去した、即物的な「物産学的なまなざし」は、後に水谷豊文が率いた尾張の本草学派にも継承され、近世本草学に対する認識および研究方法の大きな躍進として見ることができるだろう。

本草学の学問観について、以上のように蘭山およびその学統を継承した尾張本草学派では、儒学先行の伝統京都本草学派との間で大きな分岐が見られる一方、本草に対する記述についても、従来の中国典籍を中心とした京都本草学派の既成の研究スタイルと大いに懸隔がある。こうした京都本草学派従来の研究方法に対する蘭山の反省を示した文面は、以下の通りである。

教授之義、四十歳迄ハ右先師之説を相守居申候処、追々当地ニ不限、他国よりも新ニ品物等多相出て、古和産之不詳之者も今ハ真物沢山ニ有之もあり、又薬品新渡もあり、唐種類も多く渡りて、古薬品之不知リシ者も今ハ明白ニ成たるもあり、又新渡之書物も数多有之候而、古漢名之不知者も今ハ当之名も多く相成りて、古説之通りニ而ハ不相合事も有之候。依て疑問之人々、日々ニ多く相成り、右之言訣、殆迷惑ニ及べり。此時ニ当りて堅く先説を守れば、却而猶々謬之訾を免ざるニ似たり。故、日夜博く尋ね深く考て、古之穩ならざりし事共を改め、今の的当せる名目を採りて世に弘め来れり。

凡本艸之学ハ右之通、品物も追々相出、名目も追々相知れて、日新之業なれば、今より以後も、歳ヲ逐而改正もあるべき事なれば、他ノ学業とハ違ひ、古の伝来ノ通りを永く相守ル事ハ成難事也³⁰⁾。

これまで古説を守ることをディシプリンとしてきた伝統京都本草学派の欠陥に気づいた蘭山は、本草学を「日新之業」として認識を改め、古典の権威に依拠することよりも、本草に関する知識の更新、情報交換などこそ重要だと主張し、門人を戒めた。この認識は、同時期の江戸で薬品会を開催し、物産関係の情報交換を目指した江戸本草学派とは同工異曲ともいえる。この学風は後に豊文によって継承され、豊文を軸にして嘗百社のグループは自発的に、年に数回の採薬活動を行い、月に数回の本草品評会を組織した。

従来では、京都本草学派といえば、中国からの本草典籍に対する考証を重視する「書斎派」で、それと対置するのは「行動派」の色合いが強い江戸本草学派である、と認識されがちであったが、蘭山に至って両学派におけるこうした対照的な特徴は薄まり、むしろ中国古典の権威から脱却する一致した方向性が見られた。源了円の「実学史観」をもって言えば、この時期において、日本の学者は中国の学問や思想の理解が非常に深まって、自己の消化した中国の学問や思想を知的武器として自由に使い、ある状況の中で自己に課せら

²⁹⁾ 小野蘭山「小野蘭山寛政七年書簡下書」(国会図書館所蔵 [WB 9-10])。引用は小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会『小野蘭山』所収の翻刻による。438頁。

³⁰⁾ 小野蘭山「小野蘭山寛政七年書簡下書」(国会図書館所蔵 [WB 9-10])。引用は小野蘭山没後二百年記念誌編集委員会『小野蘭山』所収の翻刻による。439頁。

れた課題をそれによって解くという自主的態度が形成されたのである³¹⁾。

蘭山の学風への継承は、嘗百社が本草に関する交流を広めることを目的として、多くの本草品物を集めようとするため、作成・配布した「嘗百社交流申入状」³²⁾からもうかがわれる。この申入状においては、嘗百社創始早々の幅広く本草に関する聞見や産物標本を求め、同好者の加盟を促す意気込みが終始一貫している。和蘭名と漢和名の同定の正確さに対する重視や、四方の物産奇聞に対する渴望など、物産の情報更新への熱心さが示される一方、後半に書かれている取り寄せた品物の長時間保存のための、草木金石虫魚禽獸各産物に関する標本製法も一つの見どころである。全文を掲載するのはあまりに長きにわたるため、蘭山の学風をよく反映した一部だけを抄出し、読者の理解に資する。

余党本艸ノ学ヲ嗜ム。然ルニ名物ヲ查訪スルハ、両間万類ノ繁キ諸国ヲ跋渉・広捜・遍採スルヲ得ズ、寡聞偏陋ナルヲ、イカンセン。竊ニ以テ一大恨事トス。因テ已ムヲ得ズ、敢テ此筭子ヲ以テ、茫昧ニ海内博物ノ君子ヲ煩ハシテ、同好ノ交ヲ通ジ、聞見ヲ弘メンヲ乞フ。

(中略)

一 草木金石虫魚禽獸ノ類、其産地(某国某郡某村ニ、或ハ某山某川)方言並ニ形状ノ説、或ハ図又培養ノ法等(但薬物ヲ初メ、食用トナスベキモノ、救荒ニ充ツベキモノヨリ、器材民用ニ至ルマデ)。

(中略)

一 薬物ノ真贋ヲ弁ジ、優劣ヲ択ムヲ初メ、和産アリテ漢名詳ナラザルモノ、漢名アリテ和産詳ナラザルモノ、又和産アリテ和漢名詳ナラザルモノ等ヲ新ニ發明 [= 発見] スルノ説、且ツ先輩定ムル所ノ漢名或ハ議スベキモノアリ、是ヲ訂正スルノ説、ソノ他、清俗ノ名、喁蘭 [= 和蘭] 訳述ノ説ニ至ル。

一 本艸名物ノ学ハ多識ヲ以テ参合スベシ。但産物多クハ其風土ニ因テ形状一ナラズシテ質ニ良楛アリ、又彼ニ在テ此ニ無モノ多シ。因テ四方ノ異聞ヲ得テ、務テ浩博ニ從ンヲ欲スレバ、其説ノ贅ナランヲ恐レテ鴻教ヲ吝ムヲ勿レ。薬物功能ニ限ラズ、奇草珍木及ビ金石虫獸希有ノ品、又他ノ聞見ノ説、蝦夷・朝鮮・琉球・諸異邦ノ産ニ至ルマデ。

(中略)

禽獸 ソノ腹ヲ剖シ腸ヲ出シ、肉ヲ剥ギ去リ、ソノ内ニ枯礬 [焼明礬]・石灰等ヲ摻シ、苧麻 [カラムシ]、或綿ヲ填テ合縫スルノ法アリ。能、遠ニ致シ、久ニ堪ユベシ。然トモコレヲ煩ハスヲ憚ル。只ソノ翅毛角距ニテモ、得ンヲ乞フ。

(二) 学派間の交流

尾張本草学派は、水谷豊文の時代においては、京都本草学派との流派間の組織的・公的

³¹⁾ 源了円『近世初期実学思想の研究』、創文社、1980年、95頁。

³²⁾ 本資料は磯野直秀・田中誠「尾張の嘗百社とその周辺」に紹介されており、従来は「尾張嘗百社出品勧誘状」「本草会出品依頼状」などと呼ばれてきたが、磯野氏は本資料の内容は博覧会への出品勧誘ではなく、広く交流を求める趣旨なので、「嘗百社交流申入状」と呼んでいる。磯野直秀・田中誠「尾張の嘗百社とその周辺」、『慶応義塾大学日吉紀要・自然科学』(47号)、2010年、23頁。

な交流はまだない。その時点の交流は個人と個人、本草家の間で行われていた。

寛政十一年（1799）、小野蘭山は幕府医学館の招聘により、江戸に下る途中の名古屋で、水谷豊文・浅野春道・大窪太兵衛・小川廉治・林玄仙などに迎えられた。この出来事については小野蘭山の『公勤日記』³³⁾のなかに記されている。これは尾張本草学派と京都本草学の初めての交流といえよう。この交流の意義として、尾張藩に本草学に興味を持っている人たちがそれをきっかけに一堂に会することができ、蘭山との面会を通じて、本草学への志を一層深まらせた。蘭山との面会は、尾張本草学派誕生の種を蒔いたものとして考えられなくもない。

文化二年（1805）、豊文は尾張藩設薬園の御下屋敷御薬園の管理に係った。それから、豊文はこの薬園を拠点にして、全国各地での採薬活動を始めた。その上、採集した薬物を薬園に移植・栽培し、研究を行った。それと同時代に、小野蘭山の門人である岩崎灌園は、当時江戸にいた江戸本草学家の代表人物であったが、豊文と岩崎灌園の二人はよく文通のやり取りをして、各自の本草植物に関する情報交換をしていた。当時の岩崎灌園は『本草図譜』の編纂に取り組んでいた。『本草図譜』に記された木曾・濃州・尾州・三州・江州・伊吹山・加賀白山・勢州・大和などの植物情報は直接あるいは間接に豊文の影響を受けていた³⁴⁾。このような尾張本草学派の、薬物を採集し、薬園で栽培し、自ら植物に対する考察と実験を行うという実践・実証的な研究方法は、確かに岩崎灌園の『本草図譜』のような単純な名実の考証から離れ、博物学的特徴を持っている著作の成立にとって大きな助けとなった。

水谷豊文が亡くなったあと、伊藤圭介は尾張本草学派の事実上の代表者になった。江戸時代の文久期、圭介は初めて尾張嘗百社の名義で小野蘭山の門人である山本亡羊が開設した読書室物産会に三点出品した。圭介の今回の出品は、ある意味で開国という新しい事態に即応して、本草家の流派を越えての全国的本草・物産情報交換への胎動といえよう³⁵⁾。それ以降、尾張本草学派も京都本草学派も、本草学派の間の交流は頻繁になっていった。

伊藤圭介が晩年に『日本産物誌』を編纂したとき、『日本産物誌 武蔵部』で所載した産物は主に岩崎灌園の『武江産物誌』を参考にしていて、そこから伊藤圭介個人と京都本草学派の岩崎灌園との交流が見えてくる。しかし、『武蔵部』では、『武江産物誌』のなかにある「遊観」、「名木」などという園芸類の植物が削除されている³⁶⁾。伊藤圭介が『日本産物誌』を編纂したときの植物対象の選択での慎重さが窺える。

以上に述べた尾張本草学派と京都本草学派との交流から以下のような結論を導き出すことができるだろう。それはつまりこうである——尾張本草学派は京都本草学派の学統から生まれたかもしれないが、その独自の発展の流れのなかで、伝統に拘らず、創新を求め、従来の秘伝的・保守的な本草学の姿勢を捨て、積極的に他流派との交流を行い、最終的に自身ないし日本本草学の発展を一層推進していた、と。

³³⁾ 小野蘭山『公勤日記』巻一、国立国会図書館蔵。

³⁴⁾ 遠藤正治『本草学と洋学—小野蘭山学統の研究』、思文閣出版社、2003年、248頁。

³⁵⁾ 遠藤正治『本草学と洋学—小野蘭山学統の研究』、思文閣出版社、2003年、219頁。

³⁶⁾ 平野恵『十九世紀日本の園芸文化：江戸と東京、植木屋の周辺』、思文閣出版社、2006年、253頁。

第三章 尾張本草学派の実学性格——浅井貞庵との交際を例に

遠藤正治氏は論文「圭介の「尾張博物学雑記」と浅井貞庵」のなかで、圭介の九十歳の誕生日で書いた「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雑記」(略して「尾張博物学雑記」)を中心として、そのなかに記されている嘗百社の創設当初の八人の主要メンバーが全部当時の名古屋藩医・浅井貞庵と関わっているという事実を発見し、浅井貞庵が尾張本草学派の形成に果たした影響を分析した。遠藤氏のこの発見は尾張本草学の研究に関する重大な発見といえよう。しかし、遠藤氏の論文は主に浅井貞庵本人の医学観・本草学観に着眼し貞庵と尾張本草学派の数人との関連性を分析しているが、この八人の尾張本草学者の主体的性格に対する分析はなお不足しているように思われる。そのほか、貞庵本人の尾張本草学派に与えた影響も、もう少し注意深く分析する必要がある。

一方、遠藤氏はもう一点の論文「伊藤圭介の医学思想について」において、杉本勲の著作『伊藤圭介』のなかで課題として残されていた「圭介の漢方医学の流派は何か」、「圭介の漢方医学と蘭方医学の関係はどういうふうに考えているのか」、「圭介の近世本草学と近代科学発展における意義についてどう評価すればいいのか」という三つの問題について更なる検討を行った。前の二つの問題は、浅井貞庵による伊藤圭介の医学思想への影響からその解答が示唆される。

ここから、筆者は「雑記」のなかで記された八人の尾張本草学元老および伊藤圭介から出発し、彼らが浅井貞庵と関わっている著作と事跡に注目し、改めて遠藤氏の研究に再整理を行い、浅井貞庵の尾張本草学に対する影響と、尾張本草学者が浅井貞庵との関わりのなかで示した独特な個性について、更なる分析を行いたい。

まずは、遠藤氏の論文の手がかりとなった、「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雑記」のなかに記されてある尾張本草学の誕生についての一節を見てみよう。

我愛知ニ於テ、蚤ク本草學ヲ唱ヘシハ、松平君山、舊尾藩ノ儒官ニシテ、傍ラ本草學ヲ修メ、本草正偽ヲ著ハス。此編頗ル謬誤アリト雖モ、亦斯學ノ参考ニ供スベキモノトス。爾後文化ノ頃、本草ヲ嗜ムモノ頗ル多ク、同好相集リ、時時互ニ講習セリ。其徒ハ浅野春道、水谷助六、大窪太兵衛、岡林清達、柴田洞元、西山玄道、浅野文達等ニシテ、時時集會シ、藥物其他種種物品、臘葉等ヲ袖ニシ來テ、互ニ鑑訂シ、其說、中不中ヲ競ヘリ。大河内存真其頃、尚年少ナリシト雖モ、亦相列レリ。或ハ時時本草諸書ヲ會讀シ、和産有無、各自ノ發見等、相謀リテ鑑定セリ。其頃詩經名物會ヲ本町覺正寺ニ開キシコトアリ。其列品最多數ニシテ盛會ナリシナレバ、讀詩家參考ノ資トナリシ。此詩經品物會ハ、爾後多年ヲ歴テ、又伊藤ノ家ニテモ、一回開設セシコトアリシ³⁷⁾。

この一文によると、尾張藩において、最初に本草学の研究を始めたのは松平君山であるが、その著作『本草正偽』には多くの誤謬があり、せいぜい参考になる程度である。尾張本草学が本当の意味で盛んになってきたのは文化年間であり、浅野春道・水谷助六(豊文の通名)・大窪太兵衛・岡林清達・柴田洞元・西山玄道・浅野文達および大河内存真の八人が、たびたび集まり、本草学に関する情報交流や品評を行い、尾張本草学発展の幕が開

³⁷⁾ 伊藤圭介「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雑記」、『錦窠翁九十賀壽博物會誌。上』、名古屋愛知博物館、1893年、93-94頁。

けられた。

この八人を、後の伊藤圭介も入れて、それぞれの身分と職業とを考察してみると、本業は本草家である水谷豊文と尾張藩士である大窪太兵衛を除き、残った七人の本業はすべて藩医あるいは町医であることに気づく。しかも、そのうちの何人もが浅井貞庵と直接的あるいは間接的に関わっている。例えば、岡林清達と圭介の父である西山玄道は浅井貞庵の祖父・浅井図南の門人で、浅野文達と大河内存真は浅井貞庵本人の門人である。

尾張本草家の多くは医家であるという傾向は、京都本草学派の代表人物である小野蘭山や岩崎灌園のように、儒者あるいは純粋な本草学者の出身が多いという傾向とは違って、小野蘭山の門人であった豊文のように、典籍考証派の特徴を持ちながらも、それと同時に医者として、実学を崇め、薬性を重視し、薬用植物に対し実際の検証を行うなどという実用的な本草学特徴につながっていた。

（一）水谷豊文

まず説明したいのは、尾張本草学派の盟主である水谷豊文と浅井貞庵との関わりである。

文化二年（1805）三月、尾張藩医学館（当時は静観堂と称す）館主である浅井貞庵が御下屋敷御薬園（略して御薬園を称す）の薬園奉行を兼任することになった。貞庵は、薬園の経営の実際は水谷豊文や柴田洞元ら藩内有能な本草家を任用して当たさせた³⁸⁾。こうして豊文は、御薬園の事実上の経営管理者となった。豊文の「家譜」には以下の一文が記載されている。

文化二丑十二月十四日与頭山田惣右衛門より左之通申来、御薬園御用懸り出役可相勤旨被申渡候、但右御用懸り奥医師浅井平之丞、寄合津金庄七相勤候間、申合可相勤旨をも可被申渡候³⁹⁾。

御下屋敷御薬園は尾張藩が徳川吉宗の和薬開発政策に応じて設立した藩属薬園であり、その前身は御深井御薬園である。朝鮮人参の栽培という実用的な目的を中心として設立されたため、その背景を思案に入れた浅井貞庵が、当時尾張藩内で有能とされている本草家の水谷豊文を任用したのかもしれない。実際に、貞庵のこの決定は、豊文に莫大な発展の余地を与えた。魚が水を得たかのように、豊文はこの薬園の経営を任命されたあと、毎年伊勢・志摩・近江・美濃・信濃など全国各地で薬物を採集し、各地の採薬日誌も作った。また、各地で採集し得た薬草を御薬園で栽培し、今後の本草学の研究と薬品の開発に備えた。豊文のこの行動は尾張本草学の発展の大きな原動力であったともいえよう。

（二）岡林清達

次に岡林清達に対する検討に入る。圭介の『尾張博物学雑記』のなかで、豊文の『物品識名』に対する評価はこうである。

³⁸⁾ 遠藤正治『本草学と洋学—小野蘭山学統の研究』、思文閣出版社、2003年、258頁。

³⁹⁾ 遠藤正治『本草学と洋学—小野蘭山学統の研究』、思文閣出版社、2003年、271頁。

動植礦ノ三物ヲ檢策スルニ簡便ノ好書ニシテ今ニ至ル迄大ニ諸国ニ行ハル⁴⁰⁾。

一方、『物品識名』の凡例において、水谷豊文は以下のように書かれている。

吾友岡林清達素ヨリ本草ノ學ヲ嗜ム、此編ハ清達カ草創スル所ナリ、清達眼疾ニ罹テ修飾ノ功ヲ終ルコトアタハズ、浅井堯甫吾ニ囑シテ繼テ其業ヲ成シム⁴¹⁾。

以上の一文から分かるのは、『物品識名』のアイデアが岡林清達によるもので、清達が眼病のため、貞庵の囑託によって豊文が完成させたということである。

岡林清達は浅井貞庵の祖父・浅井凶南の門人である。それについては、野村立栄の『医家姓名録』のなかで記されている。

三代目岡林清達、幼年・浅井家に入門本道、安永二巳年五月壺人立、寛政十三酉二段、文化二丑二月一段、同二寅六月御目見、文政元年十二月死⁴²⁾。

岡林清達の師である浅井凶南の本草学は松岡恕庵から教わったことがあり、その本草学の特徴は京都本草学とは近い。しかし、小野蘭山を代表とした京都本草学に対して、浅井貞庵は批判的な態度をとっている。それでも貞庵が豊文に囑託して『物品識名』を完成させた理由は、おそらく二つ考えられる。その一つは、清達の師は浅井凶南で、凶南は浅井貞庵の祖父であるからである。清達と貞庵は同門ともいえる。本草学に対する考えがそれぞれ違っているとしても、貞庵の自分の同門への助けには差し支えがない。二つ目は、浅井貞庵が『物品識名』の実用的な価値を意識していたからである。『物品識名』は、約4000種の品物について、仮名書の和名から漢名を知る一種のイロハ引きの名彙である。貞庵はおそらく本書の漢名調べにおける便利さを意識していたから、豊文に囑託して完成させたのだろう。貞庵が晩年で書いた『浅井塾則』に『物品識名』は本草の参考書としてあげられ、推奨されていた。『浅井塾則』の『物品識名』に対する評価は以下である。

余友水谷助六所撰名物ノ学ニ属スルモノナリ、然ルニ医家郷菜野草ヲ用ユルニ当テソノ漢名ヲ知ント欲ス此書頗助ケアリ⁴³⁾。

(三) 柴田洞元

岡林清達に次いで、柴田洞元と彼の『日用薬品考』について考察してみる。『日用薬品考』について圭介は『尾張博物学雑記』のなかで以下のように評価している。

和漢ノ薬品ヲ詳解シ、真偽ヲ弁哲シ、漢医薬舗ノ珍宝トス⁴⁴⁾。

⁴⁰⁾ 伊藤圭介「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雑記」、『錦窠翁九十賀壽博物會誌 上』、名古屋愛知博物館、1893年、93-94頁。

⁴¹⁾ 岡林清達『物品識名』、永楽堂、稿本、1809年。

⁴²⁾ 野村立栄『医家姓名録』、名古屋市鶴舞中央図書館所蔵。

⁴³⁾ 浅井貞庵、『浅井塾則』、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵。

本書は柴田洞元が浅井貞庵の任命により水谷豊文とともに御薬園を経営している間に成立した。その内容からみると、本書は『薬性歌』と大きな関連性を持っている。『薬性歌』は貞庵が自分の医塾で本草の薬性理論を講習するとき使われた教材である。『日用薬品考』の凡例のなかでこう書いてある。

此書ハ明龔氏薬性歌所擧ノ薬品ヲ本トシ、上ハ傷寒金匱ノ諸方所用ニ及ビ、醫家普通日用ノ薬品大凡六百余种ヲ擧ゲ、専ラ其真偽上下ノ品ヲ辯ジ、和産舶来ノ有無ヲ別ツヲ主トス。但草野晩學、固ヨリ見聞ニ狭シ、遍ク四方ニ通ジテ施行スベキニ非ズ、本意僅ニ吾本藩ノ内ニ在テ、粗鄙ノ子弟為ニ或八十ガ一ニ補アランノミ⁴⁵⁾。

凡例によれば、本書は明の龔廷賢の『薬性歌』の薬品を基本にし、古方家の尊重する『傷寒論』『金匱要略』からも採って、日用の薬品約600種を挙げ、その真偽・品質などを討論し、和産舶来の有無を考証した。また、本書は薬物の和名と方言名を並置し、諸説のわかれて定まらないところは小野蘭山の説に拠ったとしている。そこからみると、洞元は小野蘭山の学派の著作に大きな影響を受けている。最後の一文は特に重要だと思われる。この一文は洞元が本書を編纂する目的を解明している。文のなかで現れた「粗鄙ノ子弟」とは、言うまでもなく当時尾張藩内における医学館あるいは医塾の生徒および町医の開業試問を受けようとしていた医学生のことを指している。洞元の本業は医者であることから考えれば、彼の口から出た「子弟」とはそういう人たちを指しているのに違いない。

ここでは、当時の尾張藩における医師取締試業という背景と浅井貞庵との関係について補わなければならない。医師取締試業とは、それらの「藩医の子弟」（寄合医・小普請医およびその子弟）のために設立された試業である。この学業試問の結果によって、藩医子弟の登庸ができるかが決められる。当時の貞庵はちょうどこの試業の統括である医師取締試業統督に任じられている。直接にこの「子弟」たちの試問に係っているのは「町方用懸」あるいは「町在医師取締」であるが、貞庵はこの試問全体を統括していた。いわゆる、試問の出題方向や出題範囲、教材はほぼ貞庵が決めるものである。一方、貞庵が本草学においては、金元医学の影響を受け、易水学派の創始者である張元素⁴⁶⁾の本草薬性理論を強く崇め、本草薬物の品類弁別を重んじた博物学的な本草学より、日常本草薬物の薬性薬理に対する研究を重視していた。実際に、貞庵は自分の医学塾（名は静観堂で、後に尾張藩設医学館へと改称した）において、本草学の授業では、稀なることではあるが、明の龔廷賢の『薬性歌』をも教材のなかに入れていた。したがって、医師取締試業における、本草学についての出題内容は、貞庵の本草学の立場によって、『薬性歌』も出題範囲に含まれていた。

浅井貞庵の藩内における影響力とその『薬性歌』の藩内における普及性を前提に、実用性を考えると、『薬性歌』を基本にしてこの『日用薬品考』を編纂する必要性が自ずと生

⁴⁴⁾ 伊藤圭介「尾張博物学嘗百社創始沿革並諸先哲履歴雜記」、『錦窠翁九十賀壽博物會誌。上』、名古屋愛知博物館、1893年、93-94頁。

⁴⁵⁾ 柴田正簡『日用薬品考』、永楽尾東田郎、1811年。

⁴⁶⁾ 張元素（1131-1234）、字潔古、金比易水（現中国河北省易県）人、中医易水派の創始者で、「臟腑弁正」及び「扶養胃氣」の思想を重視し、後の李朱医学に大きな影響を与えている。

じてくる。柴田洞元はこうした考えに基づいて本書を編纂しはじめた。本書の内容については、貞庵が『薬性歌』の講義で重んじた薬理説に関する解釈あるいは補完ではなく、洞元が自ら藩内の薬舗を遍歴して調査することを通じて、『薬性歌』に載せている薬物の鑑別方法や和名方言名、産地などの情報を付け加えたものである。洞元のこのようなやり方は、それらの「子弟」たちが講義で薬物の薬理薬性などの理論知識を身につけたと同時に、医塾から出て、自然の中で自ら講義で学んだ薬物に接触し考察するということを望んでいたからに違いない。洞元のこうした方法は、あるいは『日用薬品考』の刊行は、ある意味で、伝統医家の局限性を破り、医者たちの注意点を単なる薬性理論の研究から逸らせて、自然の中に出て、伝統的な本草学に博物的趣味を加味させたと言える。洞元のこのような本草学モードは、まさに医家を主とした尾張本草学者たちがともに備えている長所である。後の伊藤圭介も、本業の医業を営しながらも、本草学に対する研究の情熱は生涯を通じてみなぎっていた。

同じく、貞庵は本書をも自分の『浅井塾則』中の本草参考書に収録した。本書について、『塾則』の中ではこう書いてある。

余友柴田洞元カ所撰之未得精詳カトイヘトモ買納採收之學ニ於テ頗助アリ、姑ク此書ニ就テ本師ノ訂正ヲ承クベシ⁴⁷⁾。

(四) 伊藤圭介

最後に、伊藤圭介と浅井貞庵の関わりと貞庵が圭介の医学観・本草観に果たした影響を見てみよう。

浅井貞庵が圭介に果たした影響は間接的である。圭介は享和三年（1803）に生まれた。その二年後（1805）から、水谷豊文は御下屋敷御薬園の経営担当になっており、それにつれて尾張藩における本草学研究も次第に振興した。圭介は幼いころからこうした活気ある本草学研究の雰囲気の中で成長してきた。伊藤篤太郎は『理学博士伊藤圭介翁小伝』のなかでこう述べている。

幼ヨリ植物ヲ弄スルヲ嗜好シ、余暇アレバ父兄ニ就テ、和漢名ヲ質問シ、水谷助六翁ニ随テ、植物学ヲ修メ、文化文政ノ頃、諸氏ニ從ヒ、尾、三、勢、志、濃、信、諸州ヲ遍歴シ、動、植、鉱、諸物ヲ採集ス⁴⁸⁾。

この一文からみると、確かに浅井の圭介の本草学に対する直接的な影響はなかった。圭介の本草学に対する認識は幼いころから自ら形成されていた。しかし、浅井は前に紹介した水谷豊文や柴田洞元などとの接触を通じて、尾張本草学派の誕生とその発展に一定の推進力を提供し、尾張藩において本草学研究の雰囲気を作り上げた。そのことによって幼年期の圭介は間接的に浅井の影響を受けていたとも言える。

伊藤圭介の医学観については、貞庵の影響がもっと直接的である。遠藤氏は史料『錦窠翁遺書』⁴⁹⁾のなかに収録されている『傷寒論講義』が、現東京大学総合図書館所蔵の、浅

⁴⁷⁾ 浅井貞庵、『浅井塾則』、京都大学附属図書館富士川文庫所蔵。

⁴⁸⁾ 伊藤篤太郎『理学博士伊藤圭介翁小傳』、伊藤篤太郎、1898年、1頁。

井貞庵本人が作ったものとされている『傷寒論講義』と、その内容について細部までかなりの程度一致しているという事実を発見した。この発見からは、貞庵の講義に圭介が出席した可能性が見えてくる。圭介の『傷寒論講義』の原稿で記されている日付は基本的に文政元年・文政二年・文政三年である。一方、圭介は文政三年（1820）、彼が18歳のとき町医試験に合格して医者の仕事を始めた。しかも当時は貞庵が町医の試験統括をしており、加えて圭介の兄・大河内存真も貞庵の静観堂で塾頭を担当していたため、圭介が貞庵の講義に出席したと想定しても不自然ではない。

圭介の『傷寒論講義』の内容からみれば、貞庵の講義で表した鮮明な後世方医学の立場から圭介もある程度の影響を受けた痕跡が見える。圭介は文政七年（1824）書いた『与浅井德音書』⁵⁰⁾のなかで、自分の医学観について明確に表し、自分の古医方に対する批判と後世方医学への肯定をも述べたのである。しかし、『与浅井德音書』において、圭介が肯定的な立場に立っている後世方医学に比べて、彼の蘭方医学への傾倒はもっと絶対的である。蘭方医学については、圭介が「能学ニシテ無謬ナリ」という高い評判を与えた。圭介が『与浅井德音書』を書いたのは、彼が蘭方医学へと転じた二年目である。文政六年（1823）、圭介は蘭方医・吉雄常三の門下に入り、蘭学を学び始めた。吉雄は尾張藩において最初の蘭方医であり、彼が尾張藩に登用されたのも、浅井貞庵の斡旋によるところが多かったのである。こうしてみれば、圭介がその後蘭学の道を歩み始めたことも、貞庵による尾張藩の蘭学建設における努力が、無視できない一つの間接的な原因であろう。

ここまで、嘗百社の主要メンバーと藩医浅井貞庵との関わりを検討してきた。遠藤氏は浅井貞庵の側から分析を加え、「貞庵は薬理論の特殊性と本草学の多面性を十分に認識していたので、他流派や「異端の学」に対して大きな包容力を持っていた。このような包容力は化政期に尾張本草学をうまく開花させた」という結論に至った。一方、筆者は本章において、貞庵との関わりがあった一連の本草学者に着眼し、彼らの主体的な性格を分析することを通じて、彼らの身に宿っている実学的特徴を見出そうとした。

言うまでもなく、当時の浅井貞庵は尾張藩において巨大な影響力を持っていた。こうした巨大な影響力は好機、あるいは衝突の形で、嘗百社の本草学者たちに影響をもたらした。嘗百社の本草家たちはこれらの好機や衝突とぶつかったとき、うまく機会を利用し、あるいは矛盾を解決する。それによって、従来の分野から新たな領域へと邁進した。すでに述べたように、柴田洞元や岡林清達、また伊藤圭介などの人は、医者である本業を守っていると同時に、自身の学識の局限性に気づき、その局限性を破ろうと新たな未知なる分野へと踏み込んで探索し続けた。また、水谷豊文は御薬園の経営という好機に恵まれたあと、従来の薬園の意味を一変させた。幕府の殖産興業と和薬開発などの政策を徹底すると同時に、さまざまな形式で薬園を利用した。例えば、薬園を本草家たちの集会する場所に使い、そこで薬品会・本草会などを設け、または、各地に採った本草植物をそこで栽培した。これらの活動によって、伝統本草学は近代科学への道を歩み出した。尾張本草学家たちのこうした接触と交流によって喚起された探索・革新・実行といった精神は、本草学に多様な内在的革新の要素を具備させることになった。同時に、彼らが描いた一つ一つの経歴は、

⁴⁹⁾ 『錦窠翁遺書』は土肥顎軒旧蔵書で、現存国立国会図書館顎軒文庫。内容は伊藤圭介の講義録、訳稿など全39冊の遺稿集である。

⁵⁰⁾ 『与浅井德音書』は現在国立国会図書館顎軒文庫に所蔵する『錦窠翁遺書』の第37巻である。

まさに、明治時代の日本が、西洋の新しい学術体系の侵入に当たり、試行錯誤を繰り返し、多彩なる新学科・新産業を発展させてきたという実態の縮図ではないだろうか。

おわりに

以上、本稿は「蘭山の学統」および「浅井貞庵との関わり」という二つのテーマをめぐって、尾張本草学派の本草学における特色と学問的性格とを検討してきた。この二つのテーマは、ちょうど二つのベクトルから尾張本草学派の内的性質を反映している。つまり、本草学史の客観的歴史性を反映する「蘭山の学統」と、一定の現実状況に取り囲まれている本草学者の主體的能動性を反映する「浅井貞庵との関わり」である。

具体的にいえば、「蘭山の学統」の背後に底流として流れているのは、十八世紀後半に日本本草学全体に発生した、知のパラダイムの転換である。それを「複雑系」理論でいうと、この時期の本草学内部において、知の爆発的更新と社会・経済の変化によって各要素間の相対的関係が一気に変化し再配置されることによって、「創発現象」が発生したということになる。この知のパラダイムの転換の具体的な表徴としては、主として本草学における儒教的世界観からの脱却とこれまで圧倒的な知的権威であった中国本草典籍の支配力の衰微、さらに洋書解禁と海外貿易、商品流通などによる本草知識の爆発的増加によって、従来からすると静態的な知の体系であった本草学が動態化し、接触・交流・情報交換を重視するようになったことなどが挙げられる。「蘭山の学統」を継承した尾張本草学派は、まさにこの「時代の選択」を遂行したのであったとも言えよう。

一方、嘗百社のメンバーたちと「浅井貞庵との関わり」が示したのは、状況に応じた取捨選択、情勢に対する判断力、本草に対する情熱など、いわゆる一種の実学精神である。このような実学精神に満ちた主体性をもって、嘗百社のメンバーたちは、蘭山からもたらされ、京都本草学派から進化してきた新しい本草学の学問観を、実際の現実状況において実践し、現実状況と関わりながら、未曾有の本草学の成果を实らせたのである。

尾張本草学派は「客体」と「主体」という二つのベクトルにおいて、ともにおそらくは妥当な選択を行ったからこそ、中心から地方への本草学の移行に意味を賦与し、近世本草学の中期から後期への知的転換を成功させることができたのである。

尾張本草学派の話はまだ終わってはいない。この後の幕末のより複雑な局面において、嘗百社の代表人物である伊藤圭介はどのように本草学を再構築していくのだろうか。これについての研究は、また後日稿を改めることにする。